

横手市田久保下遺跡出土の鉄製品

高橋 学* 庄内 昭男**

1. はじめに

横手市田久保下遺跡は、「秋田ふるさと村」建設予定地内で1989年に新発見された遺跡である。1990年には秋田県埋蔵文化財センターが同事業に伴う事前発掘調査を実施した。その結果、平安時代の須恵器窯跡・土師器平窯跡及び竪穴住居跡・掘立柱建物跡等と共に古墳時代の土坑墓が8基検出された。特に古墳時代の墓群は、県内では初見の事例であり注目を集めた。

同遺跡の報告書は1992年に刊行されたが⁽¹⁾、ここには土坑墓から出土した遺物のうち、鉄製品は出土時の状況のまま実測した図を掲載していた。本年度(2006年)に入り、鉄製品の保存処理が実施されたことを受けて、本稿では鉄製品の再実測と観察を通して見えてくる田久保下遺跡の土坑墓についての再検証を行うものである。

2. 横手盆地の古墳時代遺跡

秋田県域における古墳時代(4～6世紀代)⁽²⁾の遺跡は、非常に少ない。能代市寒川Ⅱ遺跡、男鹿市小谷地遺跡、由利本荘市西目町宮崎遺跡といった日本海沿岸部に点在する遺跡を除くと、その他の遺跡は横手盆地に集まっているのである。

① オホン清水B遺跡(横手市塚堀)⁽³⁾

1983年に行われた発掘調査では古墳時代の竪穴住居跡1軒、土坑7基が検出された。出土遺物には5世紀中頃～後半代の須恵器有蓋高坏や土師器(坏・椀・高坏・甕・壺類)がある。出土須恵器の生産年代は県内では最も古い事例であり、畿内産の可能性が指摘されている。

② 郷土館B遺跡(横手市赤坂)⁽⁴⁾

1991年に実施された確認調査で、竪穴状遺構内から土師器小型丸底甕1個体が完形・正立して出土した。同形の甕の類例は県内にはなく、4世紀代に遡る土師器の可能性がある。

③ 会塚田中B遺跡(横手市雄物川町会塚)⁽⁵⁾

2006年に行われた発掘調査で古墳時代の溝跡2条等が検出され、土師器坏・高坏・甕が出土した。土師器はオホン清水B遺跡出土遺物と類似することから、5世紀後半の時期が推測されている。

④ 大久保郡山遺跡(羽後町大久保)⁽⁶⁾

発掘資料ではないが、本遺跡から採集された土師器高坏の脚部が1点残されている。これはオホン清水B遺跡や会塚田中B遺跡の高坏に類することから、5世紀後半代に属すると見られる。



1: 田久保下遺跡 2: オホン清水B遺跡
3: 郷土館B遺跡 4: 会塚田中B遺跡
5: 大久保郡山遺跡



第1図 遺跡位置図

3. 土坑墓の概要

検出された土坑墓8基は、南西から北東方向に下る丘陵地緩斜面部に立地する。標高は73m程である。各土坑は、長方形ないしは楕円形の平面形

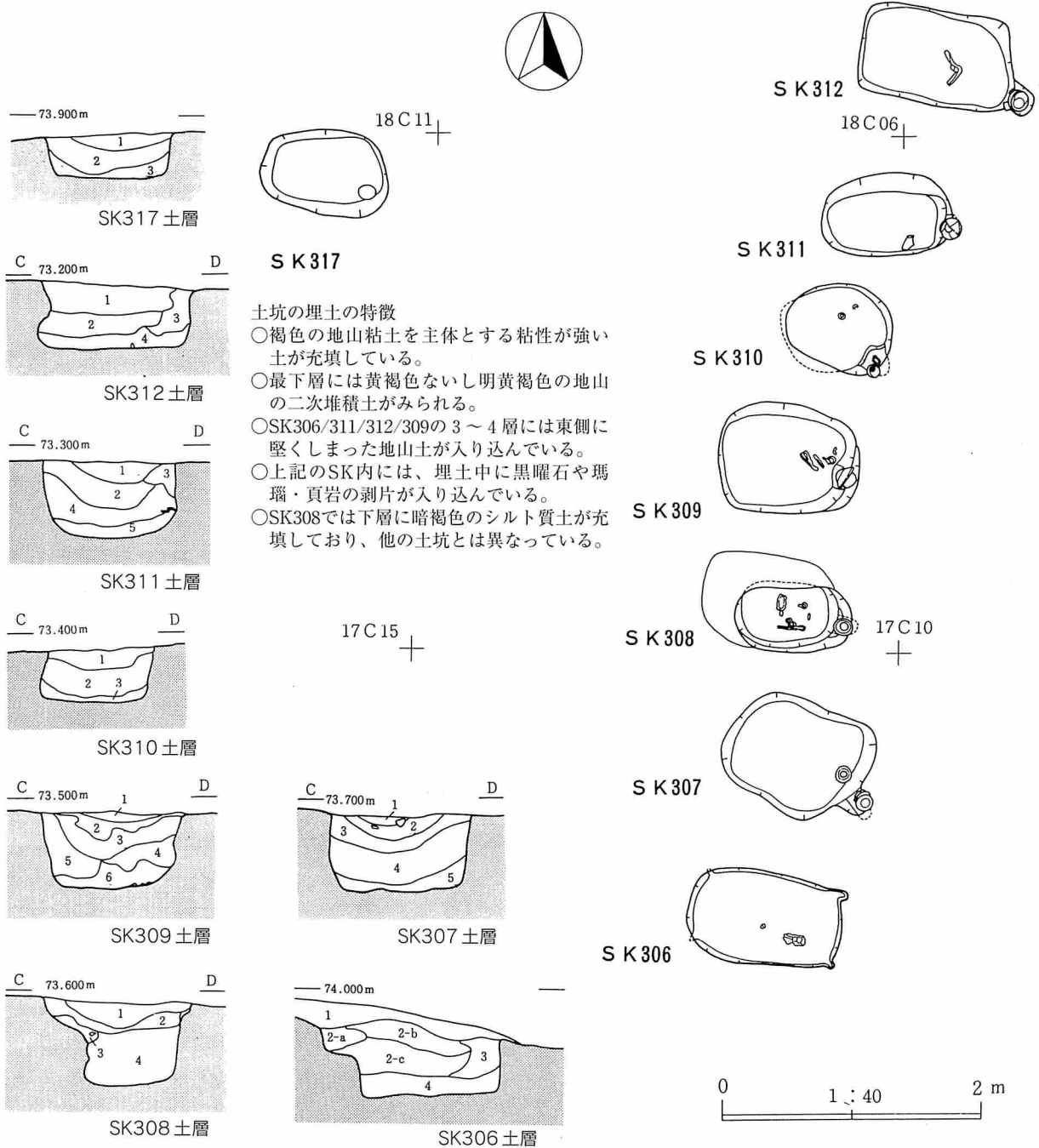
* 秋田県埋蔵文化財センター

** 秋田県立博物館

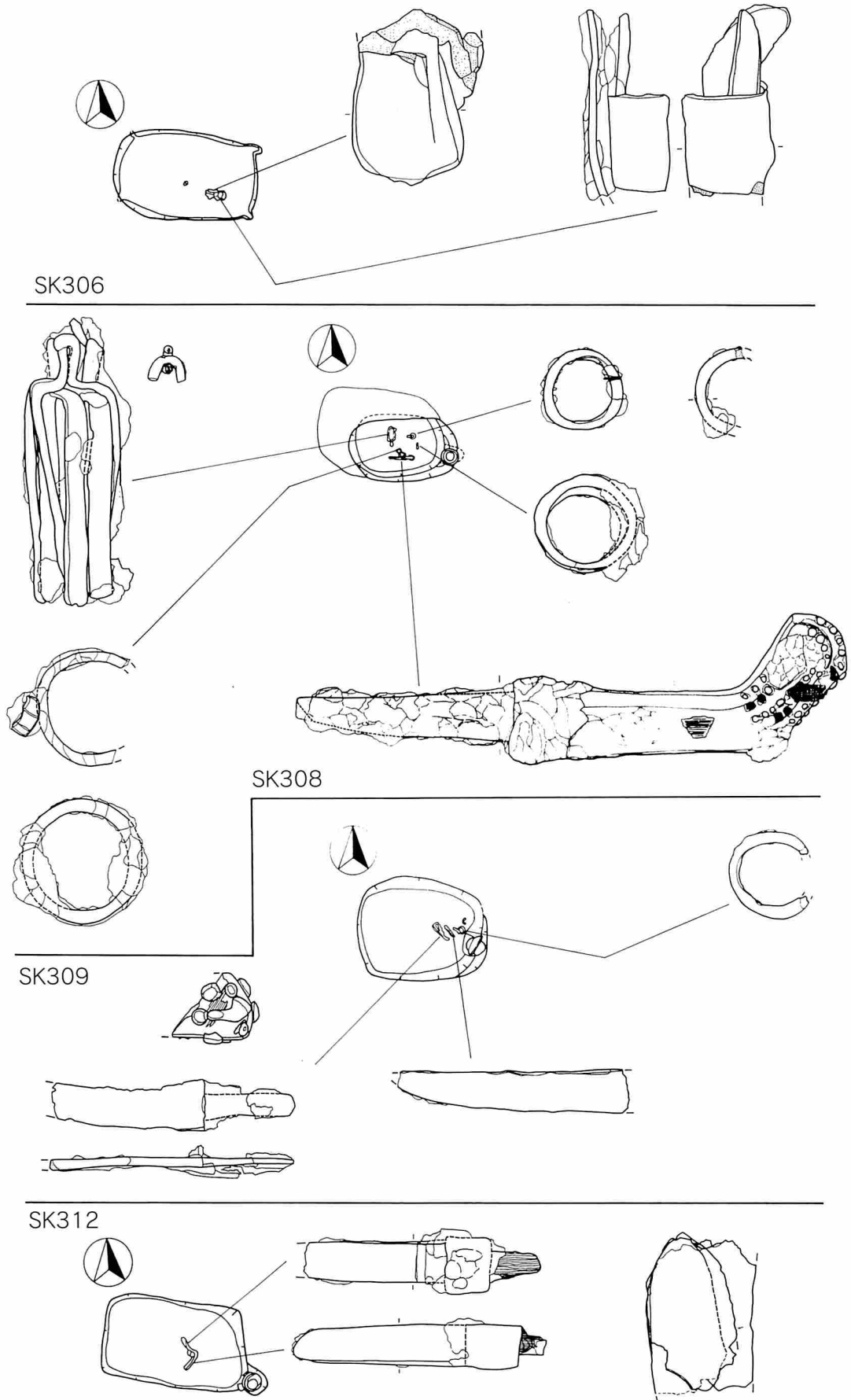
状を示す。長軸は東-西方向にとり、うち7基は25~40cmの間隔を保ちながら南北一列に連なる。各土坑の規模は長さ85~122cm、幅50~85cm、推定される深さは70cm以上である。土坑東壁面には袋状の掘り込みが見られ、そこに2個一対・合口状に土器が納められていた。その他の副葬遺物には、底面上に各種の鉄製品や竹製品（筥）が、埋土上~中位には黒曜石を主とする剥片が認めら

れた。また埋土最上層の観察から9世紀代には土坑上面が窪んでいたと判断された。以上の諸点から各土坑は、東側頭位の屈葬墓であり、高い封土をもつ埋葬景観を取るものではないと推測された。

各土坑が構築された時期は、須恵器・土師器の製作時期から見れば、6世紀前半~7世紀初頭である。



第2図 土坑墓の位置



第3図 土坑墓内の鉄製品出土状況

4. 出土鉄製品の分類

以下各鉄製品の説明は、土坑番号の小さい数字からとし、各土坑毎に番号を付した。

<306号土坑出土の鉄製品>

1. 幅36mmの筒状金具の中に、長さ76mmの刀の茎部が付着している。筒状金具の内径が26×22mmであるのに対して茎部の幅は12mmである。筒状金具は鞘口にあたるとすると、茎との幅差をもっている、小刀の一部と見られる。
2. 上記の筒外側に「へ」の字状のものが付着しており、最大幅18mm・厚さ4.5mmである。曲刀子の基部と見られる。
3. 短冊の先端がいくぶん丸みをもち、最大幅が47mmである。表面片側が三段の段差になっているが、中が空洞になっている。斧状の工具の一部と見られる。

<308号土坑出土の鉄製品>

1. すでに保存処理済みのものは、木製の柄が付いた状態で出土した刀子である。柄の先端から刃先まで全長が23cmであり、現存する刃部の長さが92mm、木製柄の部分の長さが138mmである。木製の柄に継ぎ目が見あたらないことから、鉄部・刀子は差し込まれたものである。差し込みの長さは50mmと推定される。木製柄の作りをみると、差し込み部の断面は楕円形で、長径26mmを測る。握り部は中央部を盛り上げ、2列に直径2mmの鉾を打ち込んで飾りにしている。
2. 処理後も一塊になった状態のものである。形状がはっきりしているものの一つは、長さ90mmのU字状の本体に、長さ22mmの突起を持つ形状の物であり、幅1cmの棒を中央から折り込んで製品としている。塊は同じU字状の製品が四つ合わさっており、横断面から二つのものに別の二つが垂直に食い込む様に重なっている。資料は、鑷子であることが特定できた。
- 3～7. 環状鉄製品としてきたが、直径33mmのものと、直径36mmの環状鉄製品が、二点出土している。さらに直径40mmのものがある。1mmに満たない糸で周囲を隙間無く巡らしてお

り、形状と出土状態が、対になっていることから装身具の可能性が高い。

<309号土坑出土の鉄製品>

- 1～3. 刀子が二点出土している。1は、長さ95mm・最大幅18mmの刃先である。2は、長さ38mmの茎部に刃部の途中までつながるものである。3は、木製柄の先端であり、5mmほどの鉾を差し込んで飾りとしている。
4. 直径36mmの環状鉄製品が、一点出土している。

<310号土坑出土の鉄製品>

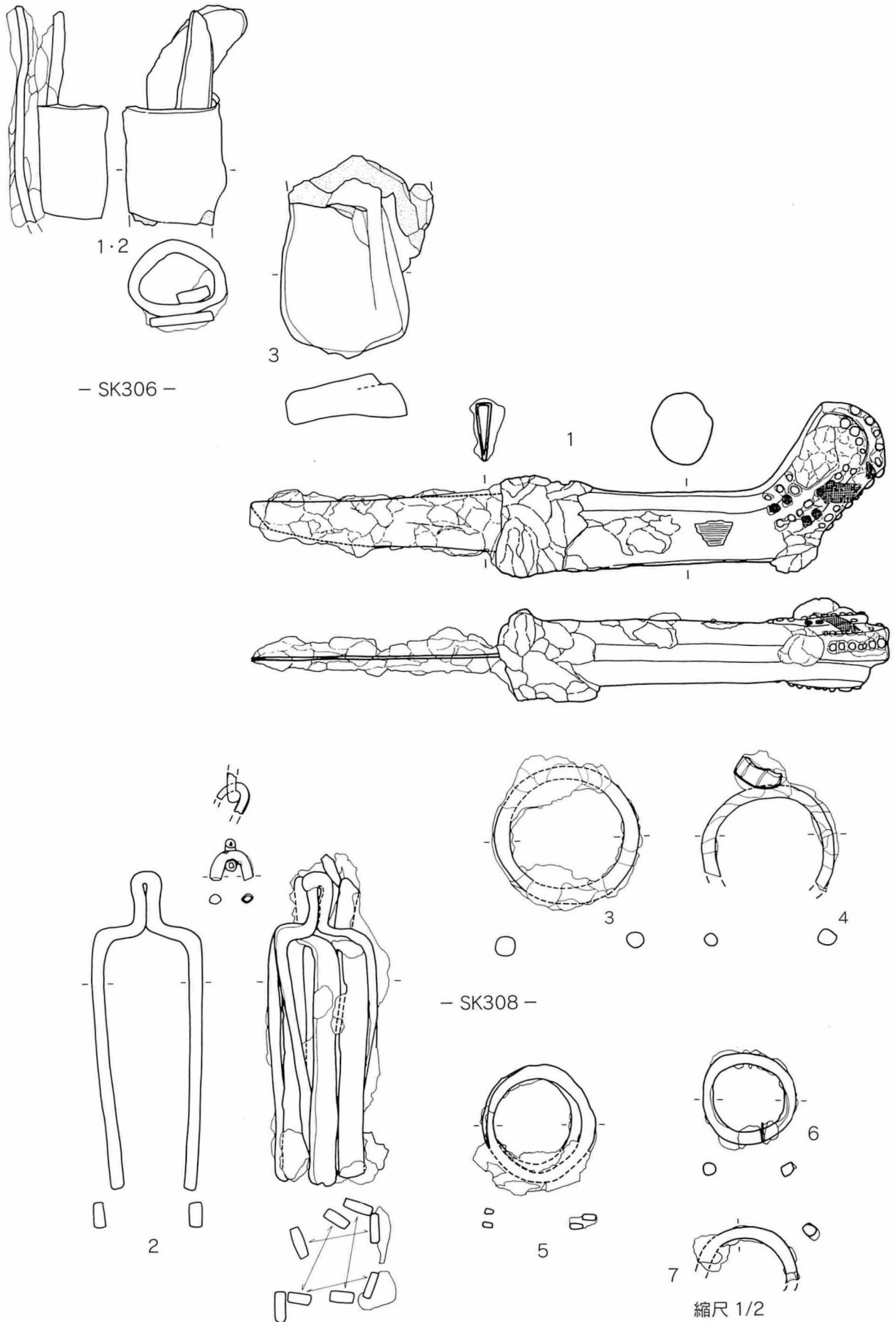
- 1・2. 直径40mmの環状鉄製品が一点と、破片が1点出土している。

<312号土坑出土の鉄製品>

1. 扁平な鉄鏃が重なって一塊になったもので、断面からは、三枚が重なっているように観察された。上で付着していた一枚ははずれ、幅36mm・長さ67mm・厚さ1.9mmを測る。
- 2・3. いずれも鞘口が残った刀子が二点出土している。2は、長さ95mm、刃の最大幅22mmで、3は、長さ80mm鞘口の幅が27mmである。茎部に木製柄の痕跡が残っている。



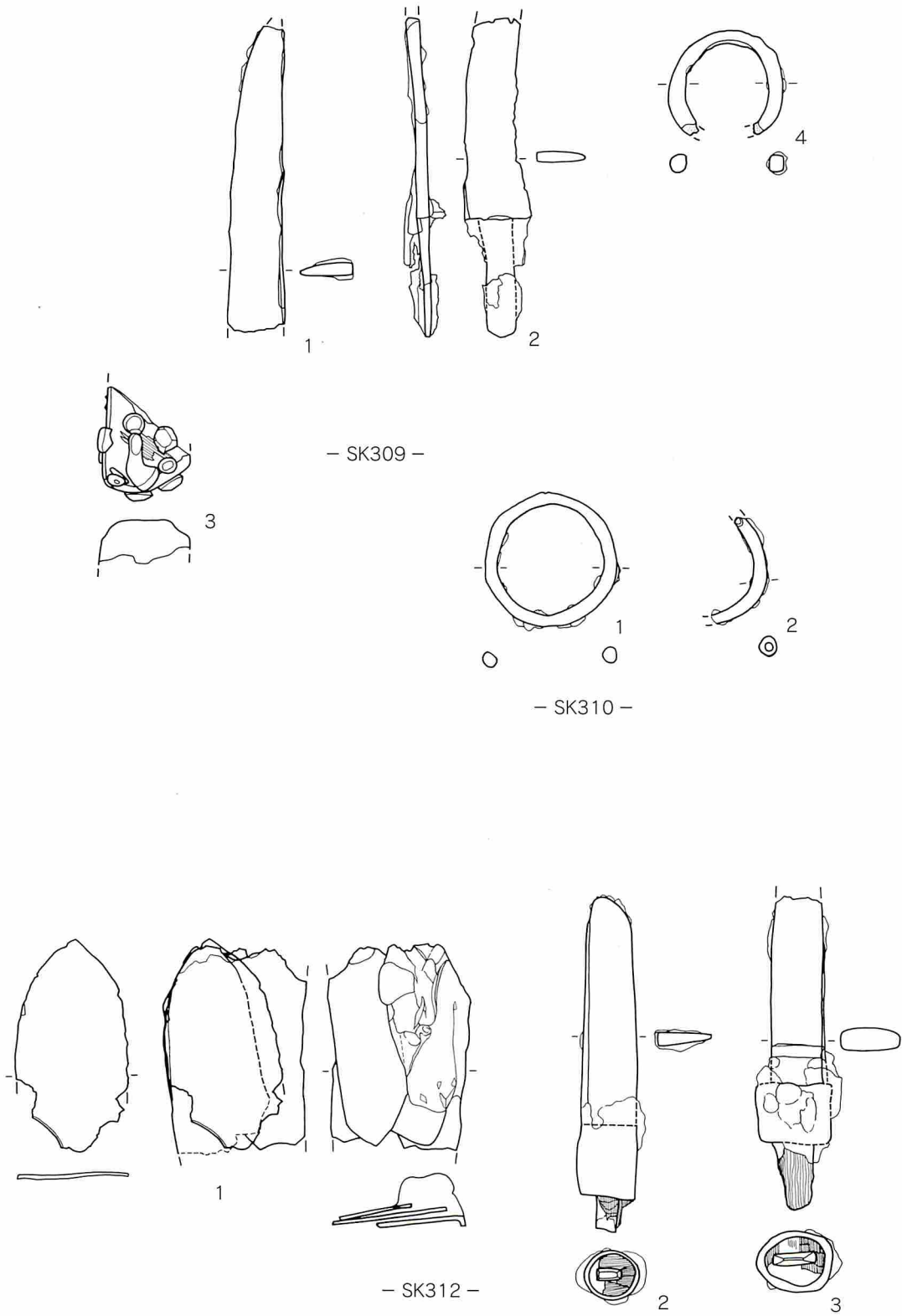
第4図 SK308鉄製品出土状況



- SK306 -

- SK308 -

第5図 鉄製品実測図 (1)



第6図 鉄製品実測図 (2)

縮尺1/2

5. 出土鉄製品と田久保下遺跡

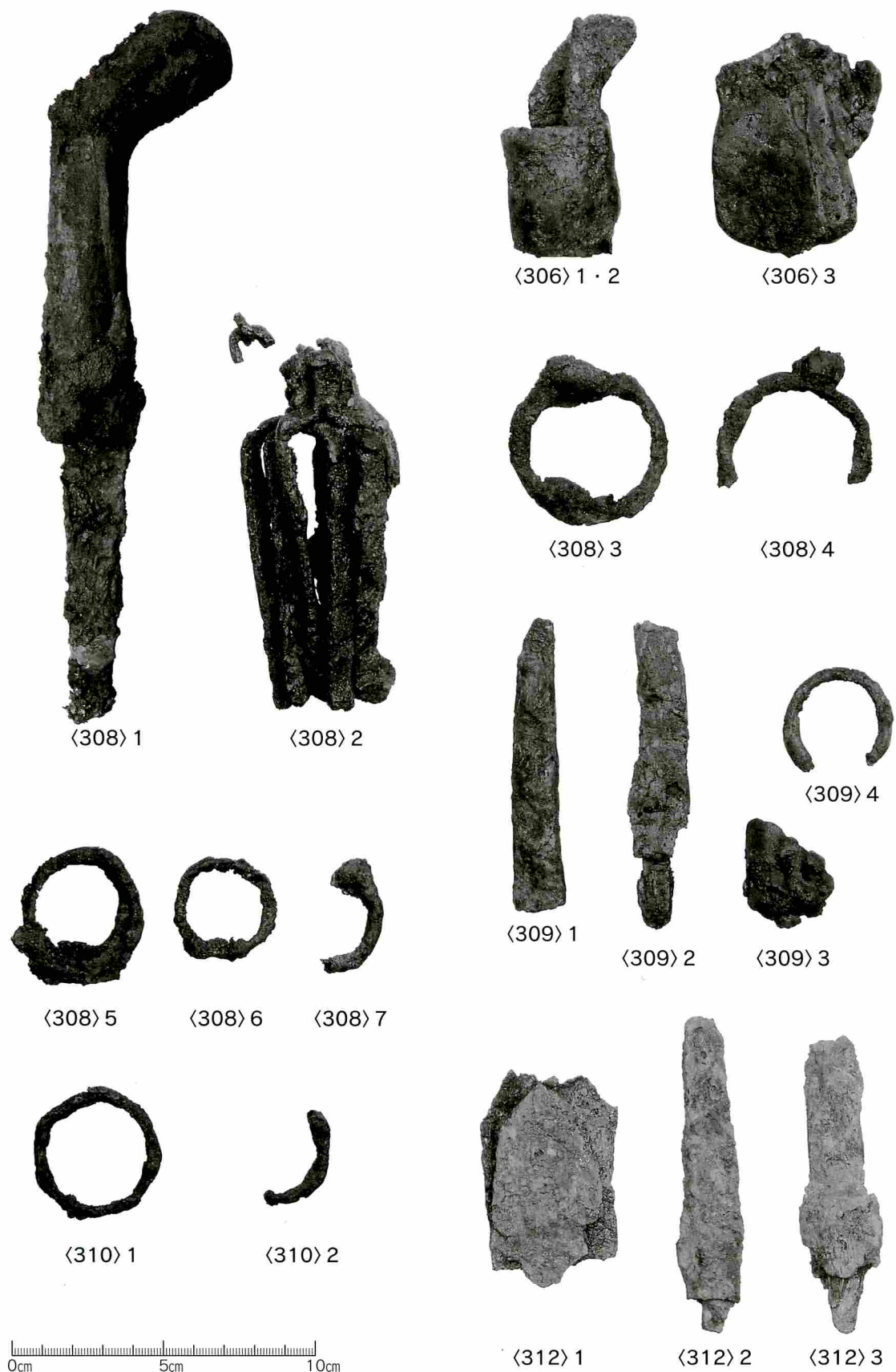
墓は、立地や構造からはほぼ同時期に存在し、須恵器・土師器の年代から6世紀前半から7世紀初頭と捉えられてきた。とくに中央に位置する308号土坑は、各種の鉄製品が副葬された墓である。墓の副葬品としての鉄製品の中で、鐻子と扁平な鉄鏃は、秋田県においては初めての発見であり、いずれも東北地方の日本海側では最北の発見例となった。鐻子はこれまでの比較研究によって6世紀代から7世紀代に、鉄鏃は6世紀代に年代が推定される。なお古墳時代の鐻子は、東北地方の太平洋側では、岩手県岩崎台地遺跡群では4基の土坑墓から、青森県丹後平古墳群では2基の土坑墓から、各1点の出土がある。各地の遺跡の出土をみても4点が合わさった形で出土している例はない。これまでの集成によって、鐻子は刀子と共に出土することから、革製品のあて金具と想定する考えが示されてきた。出土状態から、四角の囲みを作るための装置の金具として、あるいは金具自体を権威の象徴としたものの二つの見方ができる。刀子については、柄に鋳飾りを付けたものが1点あり、その他にも木製飾りが1点あった。刃部と柄が直線になるものと刃部と柄が「へ」の字状になる二種類があることがわかった。

こうして鐻子・鉄鏃・刀子は南からの古墳文化の影響を色濃く反映させたものであり、横手盆地が古墳文化の圏域に、早い段階で組み込まれて行ったことが想定される。

最後になりましたが、本報告をまとめるにあたり、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館の千賀久氏・福岡県北九州市埋蔵文化財センター宇野慎敏氏、大分県杵築市教育委員会吉田和彦氏、岩手県北上市教育委員会小田嶋知世氏に文献の紹介など御教示をいただきました。記して感謝いたします。

註

- (1) 秋田県教育委員会「田久保下遺跡」『秋田ふるさと村（仮称）建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』1992年
- (2) 古墳時代とは、概ね3世紀後半～4世紀初頭を上限とし、平城京遷都（710年）までの時期とされる。一方、推古天皇が592年に豊浦宮で即位してから平城京遷都までの時期を「飛鳥時代」とも称されている。本稿では飛鳥時代以前の時期を古墳時代として表記する。なお古墳時代は前期・中期・後期の三時期に区分され、飛鳥時代は終末期（古墳）とも呼ばれている。
- (3) 横手市教育委員会『オホン清水－第3次遺跡発掘調査報告書－』1984年
- (4) 横手市教育委員会『赤坂総合運動公園範囲確認調査報告書』1992年
- (5) 横手市教育委員会『会塚田中B遺跡』現地説明会資料 2006年7月
- (6) 羽後町教育委員会『大久保郡山遺跡詳細分布調査報告書』1992年
- (7) 島田祐悦「横手盆地における5～8世紀の土器様相（試案）」『秋田考古学』第48号 2004年
- (8) 宇野慎敏『鐻子考－末永先生米寿記念献呈論文集－』1985年
- (9) 別府大学史学研究会・史学論叢第31号、吉田和彦『毛抜形鉄器の機能・用途認定に向けての基礎的研究(1)』2001年
*「鐻子」の用途については、現在結論がないままであり、したがってその名称についても学史上、「毛抜形鉄器」「二股鉄器」あるいは「鉗子」という呼び名が提唱されてきた。宇野氏が行った資料集積をふまえて、ここでは「鐻子」を用いることとした。
- (10) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター『岩崎台地遺跡群』1997年
- (11) 青森県八戸市教育委員会『丹後平古墳』1992年



〈写真一覽〉